

ジョナサン・スタインバーグ著

小原 淳訳

『ビスマルク』(上)(下)

白水社

二〇一三・九刊

四六 合計九二〇頁 各四六〇〇円

本書は、アメリカのヨーロッパ近現代史家スタインバーグによるビスマルク伝の翻訳である。

本書の叙述は、ビスマルクが属したプロイセンのユンカー階級を捉えたバークの保守主義思想の分析から始まる。その際、そこに含まれていた資本主義社会への適応力の高いユダヤ人への敵意が以前から存在していた反ユダヤ主義と結合し、自由主義ユダヤと見なされるようになったこと、またビスマルク自身もこのような志向をある程度共有していたことが指摘される。

続いて、家庭環境、交友関係など、政治家としての彼の行動を規定したと推測される様々な要因について、考察が加えられる。例えば、「弱い父」と「強い母」の間で苦悩する不幸な少年時代を送ったことが、彼と後の皇帝ヴィルヘルム一世夫妻、フリードリヒ三世夫妻との関係にも影を落としたことが記される。本書はさらに、プロテスタント敬虔主義の保守派グループ、特に国王の取り巻きを形成していた友人たちとの交際が、「気違いユンカー」の異名をとった彼を政治の世界へ導いたことを示すが、一八六二年にプロイセン首相となった彼は、オーストリアとの対立やナポレ

オン三世との連携、普通選挙の導入といった保守派の友人たちが躊躇するような選択をすることにより、一八七一年、ドイツ帝国を成立させたとする。

以後、新国家を維持し、機能させる課題に取り組んだ彼は、国際政治の面では、ドイツに対するフランスの復讐を防ぐ環境を整えることに成功する。しかし、プロイセンと帝国の様々な組織の再編を伴う国内政治は困難を極め、彼の心気症は悪化した。原理原則に囚われない彼は、保守派グループの出身にもかかわらず、情勢に応じて自由派(ユダヤ)、中央党(カトリック)、社会主義者など様々な勢力との同盟を検討することができた。一方で、自らが敵と見なす相手に対してはなりふり構わず敵対し、一八八四年に自由主義政治家のラスカーの死に際して彼がとった態度は、一八七三年の「大不況」以後猖獗を極めた反ユダヤ主義的アジテーションが拡大するのを許すことになる。結局いかなる勢力も自らの支持基盤としなかつたビスマルクは、皇帝ヴィルヘルム一世亡き後、自分とは相容れない取り巻きに囲まれていたヴィルヘルム二世と良好な関係を築けず、一八九〇年に失脚する。だが、反ユダヤ主義、反自由主義といった彼の遺産は彼と同じユンカー出身のヒンデンブルク大統領を経て、ヒトラーに受け継がれたとする。

このヒトラーとの連続性に言及した結論部分には異論もあろう。しかし、英語圏で特に蓄積されてきた皇帝や帝政期の政治家たちの研究の成果を吸収し、「ビスマルクという個性の力が接近するのを体験し、そのインパクトを記録した人びとに物語を語らせる」本書の叙述スタイルは、これまでのドイツ語圏のビスマルク研究

にはなかつた魅力を本書に与えている。ドイツ近現代史に興味のある各位には一読をお勧めしたい。
(鈴木楠緒子)